



同時代ゲーム

大江健三郎

新潮社

(11/25刊・¥1,800)

「壊す人」に率いられた人々が、四国山中、川を溯る旅の果てに見いだした「村」国家「宇宙」——この話題作からは、(著者自身も認めているように)ラテン・アメリカ文学の視点を、いくつも見る事ができる。コロンビアのマルケスが、メキシコ滞在中に執筆した、架空の村の、百年にわたる歴史『百年の孤独』、あるいは、「時」を主要テーマに据える、カルペンティエールらの作品等々と、共通する部分がある。

主人公「僕」が、双子の妹に書き綴る、村の神話Ⅱ歴史——その創世記、大日本帝国との戦いや、衰退に至る道——人々、兄弟たちの物語。これら、時空間に散乱したエピソードは、しかし、山中の盆地にある「村」へと収斂していく。さまざまな時が、すべて村の「同時代」に並行して置かれている。これは神々の目にほかならないが、ラテン・アメリカの作家にとっては、現実の一つの見方にすぎなかった。

なぜ本書が『SF宝石』で取り上げられるのか、なぜ、ラテン・アメリカの文学がSF界の注目を集めるのか——理由は、時空間をとらえるこの視点にあるといえよう。

(俊)